

[38]

氏名	土肥祐子
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学位記番号	博第473号
学位授与の日付	平成26年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	宋代南海貿易史の研究
論文審査委員	主査教授 松浦 章 副査教授 藤田 高夫 副査教授 吾妻 重二

## 論文内容の要旨

土肥裕子氏が提出された博士論文「宋代南海貿易史の研究」は次の構成からなる。

- 序論 宋代の海外貿易の発展
- 第一篇 宋代における貿易制度—市舶の組織
  - 第一章 北宋末の市舶制度 —宰相・蔡京をめぐって—
  - 第二章 提挙市舶の職官
  - 第三章 東洋文庫蔵手抄本『宋会要』食貨三八、市舶について
- 第二篇 宋代における南海貿易
  - 第一章 宋代の南海交易品
    - 第一節 宋代の舶貨・輸入品について—紹興三年と十一年の起発と変売—
    - 第二節 舶貨の内容別分類
  - 第二章 宋代の泉州の貿易
    - 第一節 『永楽大典』にみえる陳称と泉州市舶司設置
    - 第二節 宋代の泉州貿易と宗室—趙士（雪+リ）を中心として—
    - 第三節 『諸蕃志』の著者・趙汝适の新出墓誌
    - 第四節 南宋中期以降の泉州貿易
  - 第三章 占城（チャンパ）の朝貢
    - 第一節 紹興二十五年の朝貢と回賜
    - 第二節 紹興二十五年の朝貢儀礼—泉州出発から帰国までの経過—
    - 第三節 乾道三年の朝貢—占城国王の海賊行為をめぐって—
    - 第四節 南宋の朝貢と回賜—一分收受、九分抽買—
  - 第四章 南宋來航のアラブ人蒲亜里の活躍
- 結論 総論とまとめ

宋代における南海貿易に関してまとめられた論文である。北方民族の台頭により陸上による交通が阻害され、西アジア、東南アジアなどとは南海を経由して急速に関係が深まる中で行われた海外貿易つまり南海貿易について解明したものである。

第一篇では、市舶制度と提挙市舶の職官についてあきらかにしている。貿易の発展と共

に市舶の制度も整備され、知州、通判、轉運使などが兼任していたものが、北宋末には専任の提挙市舶が任じられ、市舶官の職を宋朝が注目したためであったとする。

さらに市舶の根本資料である『宋会要』市舶に関する記述に関して、東洋文庫本（藤田豊八写本）と北京国家図書館に関して詳細な書誌学的調査を行った結果を報告している。

第二篇では、宋代の南海貿易の具体的内容に関して検証を行った各論から構成される。

第一章は、具体的に輸入品である南海交易品を『宋会要』市舶より分析し、450品を抽出した。北宋から南宋にかけて貿易品が急増したこと。都における高級品である起発品と市舶司で売る変売品の売上高は政府に収められ、しだいに起発品は少なくなり、紹興11年（1141）には変売品が9割を占め、起発は乳香と武器にする牛皮筋骨が優先された、あとは変売となる。一般人に売られ、市井に流通された。

南海交易品は植物が8割、動物、鉱物は各々1割であり、輸入品の特色は植物であり、香薬、香辛料が大部分を占めたことを明らかにした。

第二章では、福建省の泉州における貿易について検討を加えている。泉州に市舶司が置かれたのは北宋中期で、その後泉州は繁栄をみる。しかし南宋になると宗室（南外宗正）への生活費援助の負担が多く、市舶の利益の半分が負担に回されたため泉州への来航船も減少し衰退したと言う。

第三章は、『中興礼書』から、占城（チャンパ）の紹興25年と乾道3年の朝貢を検討している。紹興25年の占城王は、周辺諸国を撃退して国内統一し、交易品を満載し朝貢をだした。南宋最初の都への朝貢を中国商人陳維安が主催したこと、次の乾道3年の朝貢は、前王の篡奪者の鄒亜那（ジャヤ インドラバルマン四世）が海賊行為をしてアラビア船から奪った乳香10万斤を朝貢品としたことを明らかにした。

第四章は、一人のアラビア商人の足跡を辿り、象牙と犀角を朝貢品として来航し帰国途中に、海賊に襲われ帰国できなくなり、広東に住み、中国の官吏の女性と結婚したことなどを究明している。

以上が、土肥裕子氏の提出した博士論文の要旨である。

## 論文審査結果の要旨

宋代において北方民族の台頭により陸上による交通が阻害され、海上を通じて西アジア、東南アジアとの交易が南海を経由して急速に発展した。

宋代の南海貿易に関しては、東洋学の先学によって、「市舶司」に関する問題として究明されてきた。先達である藤田豊八氏の『東西交渉史の研究・南海篇』（1932年）や桑原隲蔵氏の『蒲寿庚の事蹟』（1925年）などが、宋時代の市舶司と南海貿易の関係に関して究明し、イスラーム圏の側からは佐藤圭四郎氏の『イスラーム商業史の研究』（1981年）などによって研究が進んできたが、さらに残された多くの問題があることを、土肥氏は詳細な検討によって明らかにされた。

本論文では、宋代の海外貿易つまり南海貿易とはどのようなものであったかを解明したものである。制度面の市舶制度の解明に取り組んだ第一篇と、宋代の南海貿易の実態を解明した第二篇から構成され、とくに朝貢品などの物品に関してこれまでの研究において看過されていた問題を精査し究明したものである。

第一篇では、市舶制度と提挙市舶の職官について究明し、北宋時代は知州、通判、轉運使などが兼任していたものが、北宋末には専任の提挙市舶が任じられたこと、その提挙市舶の地位は提挙茶塩の下位の従六品位であったことや、『諸蕃志』の著者趙汝适も従六品であったことなどを明らかにした。

さらに市舶に関する根本資料である『宋会要』のテキストの校定を藤田豊八蒐集の『宋会要』と中国の北京にある国家図書館所蔵の『宋会要』とを詳細に検討したことは、重要な成果であろう。

第二篇では、宋代の南海貿易の内容に関して論述したものである。

第一章では、具体的に輸入品である南海交易品を『宋会要』市舶から 450 品を抽出し分析し、北宋から南宋にかけて貿易品が 300 種ほど増大したこと、起発品と変売品を比較し、起発品が減少し、紹興 11 年（1141）には変売が 9 割を占め、起発品は乳香と武器にする牛皮筋骨が優先され、その他は変売され一般人に売られ市井に流通したことを究明した。

南海交易品を分類し植物が 8 割、動物、鉱物は各々 1 割で、とくに植物は香薬と香辛料が 7 割強を占め、布と材木などが各々 1 割で、輸入品の特色は植物で、香薬、香辛料が大部分を占めることを詳細な検討によって明らかにした。さらに交易品の中に若干ながら中国産の物品が含まれていることなどを初めて明らかにするなどの成果が見られた。

第二章は、福建省泉州の貿易を検討し、市舶司が置かれたのは遅く北宋中期であり、とりわけ『永楽大典』に残る陳称の記録を見出し、『永楽大典』の資料を検討し、泉州での繁栄が見られるが、南宋になると泉州には在住する宗室への援助負担が増大し、さらに泉州への来航船も減少して衰えたことを論述した。

第三章は、『中興礼書』と占城側の碑文とから、占城（チャンパ）の紹興 25 年と乾道 3 年の朝貢を検討したものである。

とくに占城（チャンパ）の紹興 25 年（1155）と乾道 3 年（1167）の朝貢を検討し、紹興 25 年の占城王は、周辺諸国を撃退して国内統一した後に中国への朝貢を行った。さらに朝貢先が南宋最初の都での朝貢であったため、朝貢儀礼の手本となったことや、この朝貢が中国商人陳維安によって準備されたことを究明した。乾道 3 年の中国への朝貢は、前王の篡奪者の鄒亜那（ジャヤ インドラバルマン四世）が、海賊行為によってアラビア船から奪取した乳香 10 万斤をもたらしたことで、朝貢が認められなかったが、この乳香を市舶司が買い取っていた事実を究明し、海賊行為によって中国への朝貢品を準備した占城の朝貢姿勢が初めて明らかにされた。さらに南宋の時期より朝貢品と回賜の制度が変化し、朝貢品の 1 割は皇室へ、残りの 9 割は政府が買い取る抽買となり、回賜は 1 割に対する部分だけとなったことは、南宋政府は財源がなく、朝貢品の 9 割を買い取り、それを販売する方法で国庫を充足していたことなどが明らかにされたなどの考察は新知見と言えるであろう。

第四章は、アラビア商人の 10 年にわたる中国貿易の事績を精査し、朝貢に来航して帰途に、海賊に襲われ帰国できなくなり、広東に在住して、中国官吏の娘と結婚したことなど、これまで究明されていなかった問題を解明したことは評価できるであろう。

この博士論文は、土肥氏が半世紀にわたって書きまとめられたものであることから各章の間に若干の齟齬が見られるが、宋代における南海交易を通して、東南アジア諸国との交流を中心に検討し、これまでの宋代の海外交渉に関する分野に新しい地平を開いた成果と

言えるであろう。

最後に、土肥氏自身も指摘しているが、中国の海外交渉がさらに元代へどのように引き継がれ、発展していったかを明らかにして頂きたい。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。